新聞における文章の近代化
-明治大正期『読売新聞』を中心に-

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-05-31
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: ヤロシュ島田, むつみ
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/00023159

２０２２年度　国際日本学研究科
博士学位請求論文（要旨）

新聞における文章の近代化―明治大正期『読売新聞』を中心に―

学位請求者　国際日本学専攻
ヤロシュ島田むつみ

１．本研究の問題意識と目的

文章の近代化に関する研究、特に言文一致に関するものは、小説の分野で進んでいる。しかし文学以外の文章の近代化に関する研究は進んでいない。進藤（1981）によると、文章の近代化とは、すべての文章がすべての人にとってわかりやすく、話しことばに立脚、あるいは話しことばに近い文体で書けるようになること、また、高度で知的な内容も、香り高い芸術的表現も自由になし得るものになることとしている。このことからも、小説だけでなく、様々な種類の文章がどのように書かれていき、さらに、それらすべてが如何にして誰にとってもわかりやすい口語常体（「である」「だ」「た」））で書けるようになったのかを考えることは重要な課題となっている。

中でも新聞は、多くの人に読まれた媒体であるにも関わらず、その研究はあまり進んでいない。山本（1965）、進藤（1981）らの研究によると、本研究で対象とする『読売新聞』をはじめとする小新聞は、発行当時は談話体といわれる口語敬体中心で書かれていたが、その後明治 10 年代半ばごろから文語体中心となり、社説まで含めて口語常体で書かれるようになるのはだいたい大正 10 年～11 年としている。同時に進藤（1981）では、三面記事や家庭欄には、明治 30 年代頃から少しずつ口語体が現われることも明らかにしている。しかし、その後の調査はあまりなく、新聞の文章が記事の種類や欄によって、どのように近代化していったかという全体像はまったく掴めていない。

新聞の文章の近代化、とくに口語常体化の実態が掴みにくい理由の一つには、そこに現れる文章が多岐にわたり、きちんと分類・整理されていないことがあげられる。そこで本研究では新聞記事を、小宮（2018）を参考に、「報道の文章」「論説の文章」「身辺雑記の文章」「体験記の文章」の４種に分類し、それぞれの口語常体の出現の仕方を、文末表現を中心に明らかにすることとした。

１．新聞にみられる四種の文章（報道の文章、論説の文章、身辺雑記の文章、体験記の文章）がそれぞれどのように口語常体化していくのかを明らかにする。
２．『読売新聞』発刊当時から記事が掲載され、その文体の変化が最も大きい報道の文章を中心に調査・考察することで、新聞の文章の近代化を明らかにする。

２．論文の構成ならびに各章の要約

序章　本研究の方向性を大きく紹介するプロローグ的な章となっている。

第一章：先行研究と研究の目的

新聞の言文一致を考えるにあたり、重要な研究である山本（1965、1971）、進藤（1981）、野村（2013）や、報道の文章と比較する上で重要となる、論説の文章の口語常体化について言及している田中（2022）、森岡（1991）についてまとめている。また、テクストジャンルの違いにより、文末表現に差が出ることを指摘している工藤（1995）、仁田（2009）、志波（2015）、小宮（2018）を参照した。その結果、新聞にみられる多様な記事の文末表現には、文章の種類によって違いがあること、そのため、文章の種類の違いごとに文末を調査し、新聞の口語常体化を明らかにしていくことの重要性を指摘し、前述１、２の研究目的を設定した。

第二章：調査対象及び調査方法

本研究の調査対象となる『読売新聞』について、進藤（1981）や土屋（2002）を参照しながら、小新聞としての『読売新聞』がどのような媒体であったのかを説明した。また調査方法として、本研究の要となる四種の文章の分類について、小宮（2018）を参考にどのように分類したのかを述べた。また、四種の文章それぞれの中にみられる、文の種類の比率によっても、文末表現の出方には差が出る。そこで、文の種類を、野田（1998）を参考に、事実文、コメント文、引用文の３種に分類し、文章の種類と文の種類の用例を豊富に示した。調査は明治７年から大正 13 年まで、約１年おきの６月 15 日の新聞を対象としたことを述べた。

第三章：四種の文章の文体推移データ及び調査対象とする文末表現について

第三章では、四種の文章それぞれの中に、具体的にどのような文末表現がみられたのかを文章の種類ごと、年次ごとに詳細にデータとして示した。また、四種の文章それぞれの中に、文の種類（事実文、コメント文、引用文）がどの程度の比率で含まれていたのかも、図によって示し、解説を加えた。

第四章：四種の文章を構成する文の種類と文末表現―用例を中心に―

第四章では、前章で確認した文章の種類ごとに、文体推移の仕方や含まれる文の種類に違いがあることを、用例をみながら詳細に考察した。その結果、論説の文章、身辺雑記の文章、体験記の文章は書き手の視点から述べることが可能であり、心内語を用いて文末に口語常体を使用しやすいことが明らかになった。一方、第三者や事柄をテーマに述べる報道の文章では、心内語を用いて口語常体を用いることが難しく、文語体を選択するというのが当時は最良の選択だったことを明らかにしている。

第五章：明治前半期の報道の文章におけるコメント文の衰退―報道の文章の文語体化について―

報道の文章の中には明治 10 年代半ばまでコメント文が多くみられ、ここに読み手に働きかけたり、自分の心情を吐露するような口語敬体や口語常体が出やすいことを明らかにした。また、同時期は事実文にも口語敬体が出やすいことを明らかにした。この時期の口語敬体や口語常体は話しことばとしての印象が強く、これを用いるとどうしても「話すように」書いてしまい、書き手の主観が出やすくなる。これを払拭するために、明治 10 年代後半から、報道の文章からは主観的なコメント文が消えていく。それとともに、書きことばとして安定していた文語体が採用されるようになり、報道の文章が全体として客観的な述べ方へと変化していくことを明らかにした。

第六章：「なり」から「である」への推移―報道の文章と論説の文章を中心に―

明治大正期の『読売新聞』では、「なり」から「である」へ断定の助動詞が変化するのは、論説の文章では明治40年頃、報道の文章では大正11年だということを述べた。論説の文章の中の「なり」「である」は、仁田（2000）における「確認（直接）」「確信」の用法が多く、自分自身が直接確認した事柄や、自分自身の確信的な意見を口語常体の「である」で記述することが可能であり、このことから口語常体化が早かったことを明らかにした。一方、報道の文章では、「確認（直接）」「確信」の用法は少なく、間接知として情報を他から得て伝える「確認（既得）」の用法が多く、これが「である」にはなりづらく、「なり」が長く続いたことを明らかにした。しかし、論説の文章の中でも、書き手の主張を支える事実文として「確認（既得）」の用法を用いることがあり、その際、口語常体の「である」を使用することが明治 40 年代から多くなった。このことが報道の文章に影響を与え、大正 11 年以降、報道の文章の中でも「である」が多用されることになったことを論じている。

第七章：明治大正期の口語敬体―その使用場面の推移―

第七章では、明治 10 年代半ばに報道の文章からはみられなくなった口語敬体が、その後どのような推移をたどるのかを調査した。その結果、口語敬体は大正期に入り、報道の文章では婦人欄でのみみられることが確認出来た。この口語敬体は、明治１０年代半ばまでのように読み手に働きかけたり、行動を促したりするような啓蒙的なものではなく、婦人の読者を対象にていねいに述べるものであり、事実文中心であったことがわかった。

第八章：「だ」の使用場面の変化

第八章では、現在の新聞で多用される文末の「だ」が、明治大正期の『読売新聞』ではどのように使用されているのかを明らかにした。「だ」は当時、身辺雑記の文章のような、軽く読める文章の種類以外ではあまり用いられなかった。大正期に入り、報道の文章の中では、「そうだ」「ようだ」という形での使用が認められ、後の多用へのきっかけが認められることがわかった。しかし、この時期はまだ文末として主流になることはなかったことを示した。

第九章：「たり」から「た」への推移

報道の文章は過去の事実を述べることが多いため、「たり・り」が多用される。「た」は明治 30 年代後半から少しずつみられるが、かなり限定された使い方であった。大正 11 年に入り、ようやく「たり・り」ではなく「た」が多用されるようになる。本章では、その背景には論説の文章の存在があり、論説の文章の中で、間接知によって知り得た情報でも、書き手が事実であると認識した事柄であれば、引用の形式を用いず「た」で文末を終止して書くことが可能になったことを明らかにした。この用法が報道の文章にも影響を与え、やがて大正 11 年から「た」で終止する文末表現が、報道の文章でも多くみられるようになったことを明らかにした。

第一〇章：「れる・られる」の用法の変化―報道の文章における受身を中心に―

本章では受身を、主語と動作主の非情、有情により四種に分類、調査をした。その結果、明治 20 年代半ばまでは「人が人に～されたという」有有型受身が多いが、明治 20 年代後半から事柄を主語とした非有型受身（いわゆる非情主語の受身）が増加し、大正に入ってからは圧倒的に非有型受身、特に「～と見られている」型の受身が大正 11 年以降、急増することがわかった。

非有型受身の特徴は、人ではなく、世の中で起きた「事柄」に焦点をあて、書き手自身を事柄の外側に置き、客観的に記述することにある。「れる・られる」は、用法が変化することで、報道の文章の客観的な記述を支える言語形式となっていったことを確認した。

第一一章：新聞における文章の近代化

本章では、これまでの各章のまとめと、研究目的に対する結果を述べている。

研究目的 1. について、報道の文章は大正 11 年にようやく口語常体化する一方で、論説の文章は明治 40 年代、身辺雑記や体験記の文章では明治 30 年代にすでに口語常体していることを明らかにした。このような推移の背景には、論説、身辺雑記、体験記の文章は書き手の視点から自身の体験や考えを口語常体で書きやすい一方、報道の文章は事柄や第三者を主語にするため、自身の考えなどと結びつきやすい口語常体が用いづらいということがあったことがわかった。

次に研究目的２にあげた、報道の文章を中心とした考察を述べる。報道の文章はまずコメント文を排除し、さらに書き手の考えが出やすい口語敬体、口語常体を使用せず、文語体を選択することで、明治 10 年代半

ばから、客観的な述べ方を獲得したことが確認出来た。そしてその述べ方が、大正 11 年になるまで長く続いたことを明らかにした。また、報道の文章では、明治 20 年代に受身の用法が有有型受身から非有型受身に変化することで、事柄を主語とした客観的な述べ方が増加し、報道の文章の客観性を支える言語的な背景となることがわかった。

このような複雑な文体推移をたどった報道の文章が、最終的になぜ大正１１年に口語常体化出来たのか。そこには、論説の文章の存在がある。論説の文章は自分自身の考えを述べることが可能なタイプの文章であり、口語常体の使用も早かった。そこでは、間接知で知り得た情報であっても、自分自身がそれを事実であると認識していれば、口語常体を用いて文末を終止させて文を書くという述べ方が、明治 30 年代半ばから 40 年代にかけてみられるようになる。本来、日本語の話しことばでは、自分自身で確認したことでなければ、「た」や「である」を以て文を終止させることは難しいのだが、この時期から、論説の文章の中では、それが可能となってくる。この用法が論説の文章の中で広がり、報道の文章に影響を与えたことで、大正 11 年から、報道の文章でも口語常体で文を書くことが可能となったのである。

また、最後に、新聞の文章の近代化とは、口語常体化はもちろんのこと、論説の文章のみならず、身辺雑記や体験記といった文章の種類が生まれ、報道の文章では主観的なことは述べない、それ以外の文章では個人的な意見や体験を述べるという「書き分け」が出来るようになること、それ自体も、近代化の一つであることを明らかにした。文章の種類を確立させ、そこにふさわしい話題や文体を選び書くこと、そして、報道の文章では、それが文語体から口語常体へと変化し、すべての文章が口語常体で書けるようになること。これが出来るようになるのが大正 11 年頃であり、この時、新聞の文章における口語常体化が完成するのである。

終章：残された課題

この章では、本研究が果たした意義と、今後の課題についてまとめている。

＜参考文献＞

工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテクストー現代日本語の時間の表現ー』ひつじ書房

小宮千鶴子（2018）「新聞の文体」『日本語文章・文体・表現事典　新装版』中村明・佐久間まゆみ・髙崎みどり・十重田裕一・半沢幹一・宗像和重編集　朝倉書店 pp218～224

志波彩子（2015）『現代日本語の受身構文タイプとテクストジャンル』和泉書院

進藤咲子（1981）『明治時代語の研究―語彙と文章―』明治書院

田中牧郎（2022）「書きことばの変遷と言文一致」高田博行、田中牧郎、堀田隆一編著『言語の標準化を考える―日中英独仏「対照言語史」の試み』大修館書店 PP81～105

土屋礼子（2002）『大衆紙の源流―明治期小新聞の研究―』世界思想社

仁田義雄（2000）「認識のモダリティとその周辺」森山卓郎、仁田義雄、工藤浩著『日本語の文法３　モダリティ』　岩波書店 pp81～159

（2009）『日本語のモダリティとその周辺』ひつじ書房

野田尚史（1998）「「ていねいさ」からみた文章・談話の構造」『国語学』194 集 pp102～89（左⑴～⒁）

野村剛史（2013）『日本語スタンダードの歴史―ミヤコ言葉から言文一致まで』岩波書店

森岡健二（1991）『近代語の成立―文体編―』明治書院

山本正秀（1965）『近代文体発生の史的研究』岩波書店

――――（1971）『言文一致の歴史論考』桜楓社